

翻刻『源氏拔書』（上）

——桐壺・明石——

田 坂 憲 二

本稿は、青霞文庫本『源氏拔書』（書名は内題による）
一卷一冊の翻刻である。分量の関係から、三回に分載する。
同じ理由により、詳細な書誌的解題、本書の特徴、享受史
上の位置等は全て別稿に譲るが、翻刻に先立ち、最少限の
ことのみ記しておく。

当刻書は、極めて大ぶりの（縦三一・二糎×横二二・五
糎）古雅な写本で、全一四八丁、書写年代は室町末期頃か
と推測される。内容は、源氏物語中の和歌をほぼ全て（若
干の誤脱がある）を、多くはその直前の原文と共に抜き書
きしたものである。和歌本文、又地の文をも含めて、引用
されている源氏物語の本文に河内本的要素が強いことが、
特に注目される。

〈凡 例〉

- 表記は可能な限り原形を尊重したが、変体仮名は通行の
平仮名に、漢字は通行の字体に統一した。
- 仮名づかいは原形を尊重した。
- 全体に最少限の読点を施した。
- 和歌は前後を改行し、二字下げ、下句も追い込みの形に
統一した。原本は下句改行、又ごく一部和歌の前後を追
い込みで記す場合がある。
- 明確な誤写・誤脱には（ママ）を付した。
- 改丁は（一才）の形で示した。
- 原本は巻の替り目に空白の行を設けないが、便宜、一行
アケの形に統一した。

〈翻 刻〉

源氏拔書 きり壺

かきりあらんみちにもをくれさきたゝしとちきらせ給ける
を、さりともうちすてゝはえゆきやらしとの給はするを、
をんなもいといみしと見たてまつりて

更衣 かきりとてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきは

いのちなりけり

もろ共にはくゝまぬおほつかなさにくちおしく、いまはな
をむかしのかたみになすらへて物し給へなど、こまやかに
かゝせたまへり

きりつほの帝 みやきのゝ露ふきむすふ風のをとにこはきかもとをお

もひこそやれ（一オ）

月はいりかたのそらきようすみわたれるに、かせいとすゝ
しうふきて草むらのむしのこゑくもよほしかほなるも、
いとたちはなれかたきくさのとなり

命婦 すゝむしのこゑのかきりをつくしても長き夜あかすふ
るなみたかな

えものりやらす

更衣母 いとゝしくむしのねしけきあさちふに露をきそふるく

ものうへ人

いともかしこきはをき所も侍らす、かゝるおほせ事につけ

てもかきくらすみたり心ちになん

更衣母 あらきかせふせきしかけのかれしより（一ウ）こは

きかうへそしつこゝろなき

かくておのつからわか宮などおひいて給はゝさるへきつい
ても有なん、いのちなかくとこそおもひねん、（ママ）などのたま
はす、かのをくり物御らんせさす、なき人のすみかたつね
いてたりけんしるしのかんさしならましかは、とおほすも、

いとかなし

帝 たつねゆくまほろしもかなつてにてもたまのありかを
そことしるへく

うへ人女房などはかたはらいたしときゝけり、いとをした
ちかとくしう物し給御かたにて事にもあらすおほしけつ
なるへし、月もいりぬ

帝 雲のうへもなみたにくるゝ秋の月（二オ）いかにそ
むらんあさちふのやと

内侍せんしうけたまはりつたへて、おとゝまいり給へきめ
しあれば、まいり給ふ、ろくの物うへの命婦とりてたまふ、
しろきおほうちきに御そひとくたりれいの事なり、御さか
つきのついてに

帝 いとけなきはつもとゆひになかきよをちきる心はむす
ひこめつや

と御心はへありてをとろかさせたまふ

引入

むすひつるこゝろもふかきもとゆひにこきむらさきの
色しあせすは

とそうしてなかはしよりおりてふたうし給（二ウ）」

はゝきゝのまきに

女もれいのえおさめぬすちにておよひひとつをひきよせて
くひて侍しを、おとろくしくかこちて、かゝるきすさへ
つきぬれはいよくましらひすへき事にもあらず、はつか
しめ給ふめるつかさくらひいとゝしくなにとつけてかは人
めかん、よをそむへきぬへき身なめり、なといひをとして、
さらはけふこそはかきりなめれ、とこのおよひをかゝめて
まかてぬ

てををりてあひみし後をかそふるにこれひとつやは君
かうきふし

えうらみし、なといひはへれは、さすかにうちなきて（三
オ）」

うきふしを心ひとつにかそへきてこや君かてをわかる
へきをり

はた女のものやはらかにかきならしてすの中よりきこえた
るもいまめきたる物のこゑなれば、きよくすめる月にをり
つきなからず、おとこいたくめてゝすのもとにあゆみきて、
にはのもみちこそふみわけたるあともなけれ、なとねたま

す、きくをおりて

ことのねもきくもえならぬやとなからつれなき人をひ
きやとめける

わろかんめりなといひて、いまひとこゑ、きゝはやすへき
人のある時にてなのこひ給ひそ、なといたくあされかゝれ
は、女こゑいたうつ（三ウ）」くろひて

こからしにふきあはすめるふえのねをひきとゝむへき
ことのほもなし

おさなきものなどもありしに、おもひわつらひてなてしこ
の花をおりてをこせたりし、とてなみたくみたり、さてそ
のふみのことはゝ、ととひ給へは、いさやことなる事もな
かりきや

山かつのかきはあるともおりくにあはれはかけよな
てしこの露

思出しまゝにまかりたりしかは、れいのうらもなき物から
いと物おもひかほにて、あれたる家の露しけきをなかつて
むしのね（四オ）」にきはへるけしき、むかし物かたりめ
きて侍し

さきまじるいろはいつれとわかねともなをとこなつに
しく物そなき

やまとなてしこをはさしをきて、まつちりをたに、^{（ママ）}おやの
心をとる

うちはらふそてもつゆけきとこなつにあらしふきそふ

秋はきにけり

しはしやすらふへきにはた侍らねは、けにそのにほひさへ
はなやかにたちそへるもすへなくて、にけめをつかひて

さゝかにのふるまゐしるきゆふくれにひるますくせと

いふかあやなさ（四ウ）

いかなることつてそやといひもはてす、はしり出侍を、お
ひて

あふ事のよをしへたてぬ中ならはひるまもなにかまは
ゆからまし

おくの中将もいて来ていとくるしかれば、ゆるしたまふて
も、又ひきとゝめたまひつゝ、いかてかきこゆへき、よに
しらぬ御心のつらさもあはれも、あさからぬ世の思ひ出は
さま／＼めつらかなるへきためしかな、とてうちなき給御
けしきいとなまめきたり、とりもしは／＼なくに心あはたゝ
しくて

源

つれなきをうらみもはてぬしのゝめにとりあへぬまで

おとろかすらん（五オ）

をんな身のありさまを思にもいとつきなくまはゆき心ちし
て、めてたき御もてなしもなにともおほえす。つねにはい
とはしう心つきなしとおもひあなつらるゝいよのかたのみ
おもひやられて、ゆめにやみゆらんと空おそろしくつゝま

し

うつせみ

身ののうさをなけくにあかて明夜はとりかさねてそね

もなけれける

御ふみをもてきたれば、女あさましきに涙もいてきぬ 此
子のおもふらん事もはしたなくて、さすかに御ふみをおも
かくしにひろけたり、いとおほくて

見しゆめをあふに有やとなけくまに（五ウ）めさへ
あはてそころもへにける

身もいとはつかしくこそ思なりぬれ、とていとおしき御け
しきなり、とはかり物ものたまはす、いたくうめきてうし
とおほしたり

源

はゝ木ゝのこゝろをしらてそのはらのみちにあやなく

まとひぬるかな

きこえんかたこそなけれとの給へり、女もさすかにまとろ
まれさりければ

空蟬

かすならぬふせやにおふるなのうさにあるにもあらず

きゆるはゝ木ゝ

うつせみの内に（六オ）

ねられたます、おほんすゝりいそきめして、さしはへたる
御ふみにはあらで、たゝてならいのやうにかきすさひ給ふ
源氏
うつ蟬の身をかへてけるこのもとなを人からのなつ

かしきかな

とりかへす物ならねと、しのひかたければこのおほんたゝ
うかみのかたつかたに

うつせみのはにをく露のこかくれてしのひくゝにぬるゝ
袖かな

とてやみにけり

ゆふかほのまきにあり（六ウ）

これみつにしそくめしてありつるあふき御らんすれば、も
てならしたるうつりかいとしみふかくなつかしうて、おか
しうすさひかいたり、つまにちひさくて

ゆふかほの上

こゝろあてにそれかとそみるしら露のひかりそへたる
ゆふかほの花

御た

源氏

おりてこそそれかともみめたそかれにほのくみつる

はなのゆふかほ

中将御をくりにまいる、しおんいろのおりにあひたる、う
すものゝもあさやかにひきゆひたるこしつき、たをやかに
な（七オ）まめきたり、見かへり給て、すみのまのかう
らんにしはしひきすゑたまへり、うちとけたらぬもてなし
かみのさかりは、めさましうみたまふ

さく花にうつるてふなはつゝめともおらてすきうきけ

さのあさかほ

いかゝすへきとて、てをとらへたまへれば、いとなれてと
く

あさきりのはれまもまたぬけしきにて花にこゝろをと
めぬとそみる

とおほやけことにそきこえなす

みたけさうしなるへし、なもたうらいたうしとそをかむな
る、（七ウ）かれきゝ給へ、この世のみとはおもはさり
けり、とあはれかり給て

源

うはそくかおこなふみちをしるへにてこむよもふかき
ちきりたえすな

長生殿のふるきためしはゆゝしくて、はねをかさはさむなど
は引かへて、みろくのよをかね給ふ、行さきのたのめいと
こちたし、おんな

夕かほ

さきの世のちきりしらるゝ身のうさにゆくすゑかねて
たのみかたさよ

（ママ）

すたれをまへあけたまへれば御そてもいいたうぬれにけ
り、またかやうなる事をならはさりつるを、こゝろつくし
なる（八オ）事にもありけるかな

源

いにしへもかくやは人のまとひけむわかまたしらぬし
のゝめのみち

ならひたまえりやとのたまふを、おんなうちわらひて

ゆふかは

やまのはのこゝろもしらて行月はうはのそらにてかけ

やたえなん

おんなのいとつらしとおもひたれば、けにかはかりにてへ

たてあらんもことのさまにたかひたりとおほして

源氏

ゆふつゆにひもとく花はたまほこのたよりにみえしえ

にこそ有けれ（八ウ）

露のひかりやいかにとのたまへは、しりめにみをこせて

夕かはの上

ひかりありとみしゆふかほのうは露はたそかれときの

そらめなりけり

といふをおかしとおほしなす、うちとけ給へるさま、ところからはまいてゆゝしきまてみえ給ふ、

あはれに、わか心のまゝにとりなをしつゝみむもなつかしくおほゆへき、などの給へは、このかたの御このみにはも

（ママ）

てはな給はさりけりとおもひたまふるにも、くちおしくも侍るかな、とてなく、そもうちくもりて風ひやゝかなる

に、いたうなかめたまふて

源氏

見し人のけふりを雲となかむれば（九オ）「ゆふへの

そもむつましきかな

とひとりこちたまへと、えさしいらへもきこえす、

さすかに心ほそければ、おほしわすれぬるかところみん

とて、うけたまはりなやむを、ことにいてゝはえこそ、

うつ蟬

とはぬをもなとかとはてほとふるにいかはかりかは

おもひわつらふ

ますたはまことになときこえたり、めつらしきにこれもあはれわすれ給はす、いけるかひなしや、たかいはましこと

にか

源氏

うつせみの世はうき物としりにしをまたことのはにかゝ

る命よ（九ウ）

はかなしや、と御てもうちわなゝかるゝに、みたれかき給へるいとゝうつくしけなり、

蔵人の少将かよはすときゝたまふ、あやしやいかにおもふらん、少将の心のうちもいとおしく、又かの人のかしきもいふかしければ、この小君して、しにかへる心はしり給へりや、といひつかはす、

源氏

ほのかにものきはのおきをむすはすは露のかことをなにかけまし

少将なきをりしのひて見て、いとこゝろうしと思物から、おほしいてたるもさすかにて、御かへりくちときはかりをかことにてとらす

ほのめかす風につけても下萩の（二〇オ）「なかはゝ

しもにむすほゝれつゝ

しのひててうせさせ給へりけるさうさくのはかまをとりよせて

源氏

なくくもけふは我ゆふ下ひもをいつれの世にかとけ

てみるへき

いよのすけは神無月のついたち頃にそくたりける、ねうはう
の下らんとて、たむけ心ことにせさせたまふ、うちく
にもこまやかにをかしきさまなるくしあふきおほくして、
ぬさなといとわさとかましくて、かのこうちきもつかはす

源氏

あふまてのかたみはかりとみしほとにひたすらそての
くちにけるかな（一〇ウ）

こまかなる事共あれともうるさければかゝす、御つかひか
へりけれと、小君してこうちきの御かへりことはかりはき
こえさせたり、こうちきはなつのなれは又ころもかへのも
たひのきぬにてそ有ける

うつせみ

せみの羽もたちかへてける夏ころもかへすをみてもね
はなかれけり

おもへはあやしく人にゝす心つよくてもふりはなれぬるか
なと思ひつゝけ給ふ、けふそ冬たつ日なりける、いつしか
とうちしくれて空のけしきもいとあはれなり、なかめくら
し給て

源氏

すきにしもけふわかるゝもふた道に行かたしらぬ秋の
くれかな（一一オ）

若むらさき

おさなこゝちにもさすかにうちまもりてふしめになりてう

翻刻『源氏拔書』（上）

つふしたるに、こほれかゝりたるかみつやくとめてたく
みゆ

尼

おひたゝむありかもしらぬわかくさををくらすつゆそ
きえんそらなき

（ママ）

又あたきおとなけにとうちなく

はつくさのおひゆくすゑもしらぬまにかてか露のき
えんとすらん

このわかくさをいかてきゝたまへるならんとさまくあや
しきにこゝろみたれて、ひさしくなれはなさけなきやうに
やとて（一一ウ）

尼君

まくらゆふこよひはかりのつゆけさをみやまのこけに
くらへさらなん

法花三昧をこなふたふのせほうのこゑ山おろしにつきてき
こえくる、いとたうとくたきのをとにひゝきあひたり

源

ふきまよふみやまをろしにゆめさめてなみたもよほす
たきのをとかな

そうつ

さしくみにそてぬらしけるやまみつにすめるこゝろは
さはきやはする

源詞

山水にこゝろもとまりはへりぬれと、うちよりおほつかな
から（一二オ）せ給へるもかしこければなん、いまこの
はなのおりすすさす又参りこん

源

みや人にゆきてかたらん山さくら風よりさきにきても
みるへく

とのたまふ御もてなしこはつかいめもあやにめてたければ、
さうつ

うとんけの花まちえたる心ちしてみやまさくらにめこ
そうつらね

と申たまへは、うちほゝえみて、ときありてひとたひひら
くるはありかたかなるものをとの給ふ、ひしり御かはらけ
たまはつて

おく山のまつのとほそをまれにあげてまたみぬはなの
かほをみるかな（一二ウ）

さうつの御ともなるちひさきわらはして御せうそく有

源
ゆふまくれほのかに花のいろをみてけさはかすみのた
ちそわつらふ

御かへし

尼

まことにやはなのあたりはたちうきとかすむるそらの
けしきをも見む

又の日御ふみたてまつれ給ふ、そうつにもほのめかしおも

（ママ）

ふへし、あまうへには、もてはなれたりし御けしきのつゝ
ましく、思たまふるさまをもえあらはしはへらすなりにし
をなん、かはかりきこえさするに、なへてならぬこゝろさ
しのほとをも御らんししらいかにうれ（一三オ）しく、

などあり、なかにちいさくひきむすひて

源

おもかけは身をもはなれす山さくらこゝろのかきりと
めてこしかと

なにはつをたにつゝけはへらさめれはかひなくなん

尼

あらしふくおのへのさくらちらぬまをこゝろとめける
ほとのはかなさ

少納言にせうそくしてあひたり、おほしの給ふさまくはし
くかたる、ことはある人にておほかたの御ありさまなとも
つきくしういひつつけけれど、いとはかなき御ほとをい
かにおもほすにかとそたれくもおほしける、御ふみいと
ねんころにきこえ給ふて、たゝそのはなちかき（一三ウ）

源

なん見給へまほしきとて、れいのなかなるには
あさか山あさくは人をおもはぬになとやまの井のかけ
はなるらん

御かへりには

尼

くみそめてくやしときゝし山の井のあさきなからやか
けを見すへき

くらふの山にやとりもとらまほしくおほへたまへと、あや
にくなるみしか夜にてあさましうなかくなり

源

見てもまたあふよまれなるゆめのうちにやかてまぎるゝ
わか身ともかな（一四オ）

とむせかへりたまふさまもさすかにいみしければ

うすくも

よかたりに人やつたへんたくひなくうき身をさめぬゆ
めになしても

けにいふかひなのおさなさや、さりともいとよくをしへな
してん、とおほす、あしたにもいとこまやかにきこえ給ふ、
れいのちいさくて

いはけなきたつのひとこゑきゝしよりあしまになつむ
ふねそえならぬ

きえんそらなきとありしゆふへおほしいてられて、こひし
くも又見はおとりやせんとさすかにあやし、
源てにつみていつしかもみんむらさきの「一四ウ」ね

にかよひける野へのわかくさ

さるへきにこそとちきりことになん心なからもおもひたま
ふる、なを人つてならてきこえしらせはや
源

あしわかのうらにみるめはかたくともこはたちなから
かへるなみかは

めさましからんとのたまへは、けにこそかしこけれとて
少納言

よるなみのこゝろもしらてわかのうらにたまもなひか
んほとそうきたる

いとしのひてかよひたまふところのみちなれはおほしいてゝ、
かとうちたゝかせたまへと、きゝつくる人もなし、かひな
くてみすいしん「一五オ」のこゑしてうたはせたまふ
(ママ)

あさはらけきりたつそのまよひにもゆきすきかたき

いもかかとかな

とふたかへりはかりうたふに、よしあるしもつかへをいた
して

たちとまりきりのまかきのすきうくはくさの戸さしに
さはりしもせし

といひかけていりぬ、又もみえねはかへるもなさけなけれ
と、明行空もはしたなくてとのへおはしぬ

むさしのといへはかこたれぬとむらさきのかみにかき給へ
る、すみつきのいとことなるをとりて見給へり、すこしち
いさくて「一五ウ」
源

ねはみねとあはれとそおもふむさしのゝつゆわけわふ
るくさのゆかりを

てつきふてとり給へるさまのおさなきもいとらうたくのみ
おほゆれは、心なからあやしとおほす、かきそこなひとつ
はちてかくしたまふを、しいて見たまへは

かこつへきゆへをしらねはおほつかないかなるくさの
ゆかりなるらん

すゑつむはな

君はたれとも見わきたまはす、我と見えしとあゆみのき給
に、ふとよりきて、ふりすてたまへるかつらさにおほんを
「一六オ」くりつかうまつるは

頭中將

もろ共におうち山は出つれといるかた見せぬいさよひ
の月

うらみたるもねたけれど、この君とみたまふにすこしおか
しくなりぬ、人のおもひよらぬ事よにくむく

源氏

さとわかぬかけをはみれとゆく月のいるさのやまをた
れかたつぬる

としころおもひわたるさまなといみしういひつゝけたまへ
と、ましてちかき御いらへはたえてなし、わりなのわさや
とうちなけき給て（一六ウ）

源氏

いくそたひきみかしゝまにまけぬ覧ものないひそとい
はぬたのみに

女君の御めのとこのしゝうとていとはやりかなるわかうと、
いと心もとなくかたはらいたしとおもひて、さしよりてき
こゆ

すゑつむ花

かねつきてとちめんことはさすかにてこたへまうきそ
かつはあやなき

人つてにはあらぬやうにきこえなせは、おもふほとよりは
あさえてもときゝたまへと、いとめつらしきに、なか／＼
くちふたかるわさかな

源氏

いはぬをいふにまさるとしりなから（一七オ）を
しこめたるはくるしかりけり

命婦もいと／＼おしく心うき御さまかなと思けり、さうし

みは心ひとつにはつかしくおもひつゝけ給て、けさの御ふ
みのくれぬるもなか／＼とかとしもしりたまはさりけり、
されととりいれてみせ奉る

源氏

ゆふきりのはるゝけしきもまたみぬにいふせさそふる
よひのあめかな

いとゝものおほしみたれたるほとにて、かたのやうにもえ
つゝけたまはねは、れいの侍従そをしへきこゆる

すゑつむ花

はれぬよの月まつさとおもひやれおなしこゝろにな
かめせずとも（一七ウ）

源氏詞

たのもしき人もなき御ありさまを、見そめたる人をはうと
からすおもひたまはゝこそほいある心地すへけれ、ゆるし
なき御けしきなればつらく、なことつけて

源氏

あさ日さすのきのたるひもとけなからなとかつらゝの
むすほゝるらん

おきなかとをえあけやらねは、よりてひきたすくる、いと
かたくなゝり、おほんともの人そよりてあけつる

源氏

ふりにけるかしらのゆきをみる人もをとらすぬらすあ
さのそてかな

みちのくにかみのあつこゑたるににほひはかりはふかくし
め給へり、（一八オ）いとよくかきおほせたまへり、う
たも

すゑつむ花

からころもきみかこゝろのつられければたもとはかくそ

そほちつゝのみ

思あはせらるゝおりくゝの月かけなとおもふに、いとく
おしきものからおおしくなりぬ

大輔命婦

くれなゐのひとはなころもうすくともひたすらくたす
なをしたてすは

左京のみやうふ肥後のうねへやましらひつらん、と心もえ
すいひしろふ、御返たてまつれたれば、宮には女はうつと
ひて見あへりける

源氏

あはぬよをへたつるなかのころもてに（一八ウ）か
さねていとゝ見をしみよとや

もイ

はしかくしのもとのこうはいはいととくさく花にいていろつ
きにけり

源氏

くれなゐのはなそあやにくうとまるゝむめのたちえは
なつかしけれと

もみちの賀

中将の君、いかに御らんしけん、よにしらぬみたり心ちな
からこそ、なときこえたまへり

源氏

もの思にたちまふへくもあらぬ身のそてうちふりしこゝ
ろしりきや

とある御かへり、めもあやなりし御かたちありさまに、え
みたまひ（一九オ）しのはすやありけん

薄雲

から人のそてふることはとをけれどたちゐにつけてあ
はれとはみき

命婦も宮のおほしたるさまなとをみたてまつるに、ゑはし
たなくもさしはなちきこえず

命婦

みてもおもふみぬはたいかなけくらんこやよの人の
まとふてふやみ

さりぬへき人まにやありけん御らんせさせて、たゝちりは
かりこのはなひらにときこゆるを、我御心にもものいとあ
はれにおほししるゝほとにて（一九ウ）

薄雲

袖ぬるゝ露のゆかりとおもふにもなをうとまれぬやま
となてしこ

もりこそ夏のとなんみゆるとて、なにくれとの給ほともに
けなくや人やみつけんとくるしきを、女はさもおもひたら
す

源内侍

きみしこはたなれのこまにかりかはんさかりすきたる
したはなりとも

といふさまこよなくいろめきたり

源氏

さゝわけは人やとかめんいつとなくこまなつくめるも
りの木かくれ

源氏

君のあつまやをしのひやかにうたひてたちよりたまへるに、
をし（二〇オ）ひらひてきませとうちそへたるも、れい
にたかひたる心ちそするや

源内侍

たちぬるゝ人しもあらしあつまやにうたてもかゝるあ

まそゝきかな

とうちなけくを、我ひとりしもきゝをふましけれとうとましや、なに事をかくまてとおほゆ

源氏

人つまはあなわつらはしあつま屋のあまりもなれしと

(ママ)

そおもふ

中将のをひをときてひきぬかせ給へは、ぬかしとすまふをとかくひこしろふほとに、ほころひはほろゝとたゆれは、

中将

頭

つゝむめる名やもりいてんひきかはし(二〇ウ)か

くほころふる中のたもとに

うへにとりきはしるからんをといふ、君

源氏

かくれなきものとするゝ夏ころもきたるをうすき心

とそみる

といひかはして、うらやみなくしとけなきすかたにひきなされてみないて給ぬ、きみいとくちおしくみつけれぬる事と思給へり、内侍はあさましうおほえければ、おちとまりたる御さしぬきをひなとつゝみて奉れり

源内侍

うらみてもいふかひそなきたちかさねひきてかへりし

浪のなこりに

そこもあらはにとあり、をものさまやとみ給もにくけれど、わりなし(二一オ)と思たりしさまもさすかにて

あらたちし浪にこゝろはさはかねとよせけんいそをいかゝうらみぬ

中将の宿直ところより、これまつとちつけさせ給へと、をしつゝみてをこせたり、いかてとりつらんとこゝろやまし、このおひをゑさらましかはとおほす、そのいろのかみにつゝみて

源氏

中たえはかことやおふとあやうさにはなたのおひをとりてたにみす

とそやり給、たちかへり

頭中将

君にかくひきとられけるおひなれは(二二ウ)かくてたえぬる中とかこたん

御輿のうちもおもひやられていとゝをよひなき心ちし給に、

すゝろはしきまてなん

源氏

つきもせぬこゝろのやみにくるゝかな雲井に人を見るにつけても

花のえん

東宮の女御のあなかににくみ給らんもあやしう、わかかく思ふもいかなれはと、心うくそおほしかへされける

藤つは

おほかたに花のすかたを見ましかはつゆもこゝろのを

かれましやは(二三オ)

おほろ月よににる物そなきとうちすんして、こなたさまに

はくる物か、いとうれしくてふと袖をとらへつ、女おもひかけすうとましとおもひて、あなおそろし、こはたそ、との給へは、なにかおそろしきとて

源氏

ふかきよのあはれをしるもいる月のおほろけならぬちきりとそおもふ

女はましてさま／＼におもひみたれたるけしきいみしければ、なを名のりし給へ、いかてきこゆへき、さりともかくてやみなんとはいよにおほさし、などのたまへは

おほろ月夜

うき身よにやかてきえなはたつねても草のはらをはとはしとやおもふ（二二ウ）

といふさまいとなつかしう又きかまほしきさましたり、ことわりや、きこへたかへたるもしかな、とて

源

いつれそと露のやとりをわかむまにこさ／＼かはらに風もこそふけ

草のはらをはといひしさまの御心にかゝりておほえさせたまへは

源

世にしらぬこゝちこそすれあり明の月のゆくゑをそらにまかへて

御子のくらうとの少将たてまつれたまふ

右大臣

わかやとのはなしなへての色ならはなにかはさらにきみをまたまし（二三オ）

たゝとき／＼うちなけくけはひなるかたによりかゝりて、

きちやうこしにてをとらへたまひて

源

あつさゆみいるさの山にまよふかなほのみし月のかけや見ゆると

なにゆへかをしあてにの給ふに、えしのはぬなるへし

朧月

心いるかたならませはゆみはりのつきなき空にまとはましやは

あふひのまきに有

御ともの人／＼はみなうちかしこまりつゝ心ことにてするを、おしけたれたるありさまのこよなさあはれにおほししらるゝ（二三ウ）

御息所

かけをのみみたらし川のつれなきに身のうきほとそいと／＼しらるゝ

いとなかき人もひたいかみはすこしをくれてもあめるを、むけにをくれたるすちなきやあまりなさけなからん、とてそきはてゝ、ちひろといはひ給を、少納言はあはれにかたしけなしと見たてまつる

源

はかりなきちひろのそのみるふさのおひゆくすゑはわれのみそみん

ときこえたまへは

むらさきの上

ちひろともいかてかしらんさためなくみちくるしほののとけからぬに（二四オ）

ねたさになんとの給へは、よしあるあふきのつまをおりて

源内侍

はかなしやひとのかさせるあふひゆへ神のゆるしのけ
ふをまちける

源内侍のすけなりけり、あさましくもふりかたくもいまめ

くかなとにくさに、はしたなく

源

かさしけるこゝろそあたにおもほゆるやそうち人にな
へてあふひを

女はつかしと思きこえけり

源内侍

くやくもかさしけるかななのみして人たのめなるく
さはゝかりを（二四ウ）

いかになか／＼にときこえさするなどあるを、れいのこと

つけと見給ふものから

御息所

そてぬるゝ恋ちとかつはしりなからおりたつたこのみ
つからそうき

そてのみぬるゝやいかに、ふかゝらぬ御かことになむ

源

あさみにや人はおりたつわかゝたは身もそほつまでふ
かきこひちを

ものおもふに人のたましゐはけにかくあくかるゝものにな
ん有ける、といとなつかしけにいひて

御息所

なけきわひそらにみたるゝ我たまをむすひもとめよし
たかひのつま（二五オ）

おとゝのやみにくれまとひたまへるさまをみ給もことはり

にいみしければ、空のみなかめられ給て

源

のほりぬるけふりはそれとわかねともなへて雲井のあ
はれなるかな

われさきたゝましかはふかくそそめたまはましとおほすさ

へあはれにて

源

かきりあれはうすゝみころもあさけれとなみたそ袖を
ふちとなしける

きくのけしきはめるえたにこきあをにひのかみなるふみつ

けてさしをきていにけり、いまめかはしくもとて見給へは、

みやす所の御て（二五ウ）なりけり、きこえぬほとはお

ほししるらんや

御息所

人のよをあはれときくもつゆけきにをくるゝそてをお
もひこそやれ

むらさきのはめるかみに、こよなくほとへにけるを、お

もふたまへおこたらすなからつゝましきほとを、さらはお

ほししるらんやとてなむ

源

とまる身もきえしもおなし露のよに心をくらんほとそ
はかなき

くれなゐのつやゝかなるひきかさねてやつれたまへるしも、
見てもあかぬこゝちそする、中将もものいとあはれなるま

みにうちなかめたまへり（二六オ）

頭中将

あめとなるしくるゝそらのうき雲をいつれのかたとわ

きてなかめん

ゆくゑなしやとひとりことのやうなるを

^源みし人のあめとなりにし雲井さへいとゝしくれにかき
くらすかな

中将のたち給ぬるのちに、わか君の御めのとの宰相の君し
て宮の御まへに御らんせさせ給ふ

^源草かれのまかきにのこるなてしこをわかれしあきのか
たみとそ見る

にはひをとりてや御覽せらるるときこえ給へり、けにな
に(二六ウ)「心なき御ゑみかほそいみしくうつくしき、
宮はふくかせにつけてたにこのはよりもろき御なみたまし
てとりあへたまはず

^{大宮}いまもみてなか／＼そてをくたすかなかきほあれにし
やまとなてしこ

御ふみなれはとかめなくて御覽せさす、そらのいろしたる
からのかみに

^源わきてこのくれこそそてはつゆけゝれものおもふ秋は
あまたへぬれと

おほちやまを思やりきこえなからえやは、とて

^{権姫宮}あきゝりにたちをくれぬときゝしよりしくるゝそらも
いかゝとそおもふ(二七オ)「

ふるきまくらふるきふすまたれとゝもにか、とあるところ

に

^源なきたまそいとゝかなしきねしとこのあくかれかたき
こゝろならひに

又、しものはなしろし、とあるところに

^同きみなくてちりつもりぬるとこ夏のつゆうちはらひい
くよねぬらん

はるやきぬるともまつこらんせられになんまいり侍つれと、
おもふたまへいてらるゝ事おほくてえきこえさせ侍らすや
^源あまたとしけふあらためしいろころもきてはなみたそ
ふるこゝちする(二七ウ)「

えこそ思たまへしつめねときこえたまへり、御かへり
^{大宮}あたらしきとしともいはすふるものはふりぬる人のな
みた成けり

さかき

かはらぬいろをしるへにてこそいかきもこえ侍にけれ、さ
も心うく、ときこえたまへは、みやすところ

神かきはしるしのすきもなきものをいかにまかへてお
れるさかきそ

ときこえ給へは

^源をとめこかあたりとおもへはさかきはのかをなつかし
みとめてこそおれ(二八オ)「

やうく明行空のけしきなことさらにつくりいてたらんやうなり

源 あかつきのわかれはいつもつゆけきをこはよにしらぬ
秋の空かな

さしておもふ事なき人たにきくすくしかたけなるを、ましてわりなき御こゝろまとひとには、中く事ゆかぬにや
御息所 おほかたの秋のわかれもかなしきにねなきそへそ野
辺の松むし

かけまくもかしこき御前にとてゆふにつけて、なるかみたにこそ

源 やしまもるくにつみかみもこゝろあらはあかぬわかれ
のなかをことわれ(二八ワ)

おもふたまふるにもあかぬこゝちし侍かなとあり、いとさはかしきほとなれと御かへりあり、みやの御かへりは女別殿してかゝせ給へり

斎宮 くにつかみそらにことはるかならはなをさりことを
まつやたゝさむ

廿にてをくれ奉り給、卅にてそけふまたこゝのへをみ給ひける

御息所 そのかみをけふはかけしとしのふれとこゝろのうちに
物そかなしき

殿上人もわたくしのわかれおしむおほかり、くらういて給

て、二条よりとういんのおほちわたり給ほとゐんのかたはらなれば、大将殿も物あはれにおほされて、さかきにさして(二九オ)

源 ふりすてゝけふは行ともすゝか川やそせの波に袖はぬ
れしや

とあり、くらきほとゝいときはかしければ、又のあしたせきのあなたより

御息所 すゝか川やそせの波にぬれくすいせまてたれかおも
ひおこせん

きりいたうふりてたゝならぬあさはらけに、うちなかめて
ひとりこちおはす

源 行かたをなかもやらぬ(ママ)この秋はあふさかやまにきり
なへたてそ

御前の五ようの雪にしほれてしたはかれたるをみ給て、みこ(二九ウ)

兵部卿 かけひろみたのみし松やかれにけん下はちりゆくとし
のくれかな

なにはかりの事にもあらぬに、おりからの物あはれにて大將の君の御そていたうぬれぬ、いけのこほりもひまなうみ
ゆるに

源 さえわたるいけのかゝみのさやけさにみなれしかけを
みぬそかなしき

とおほさるゝまゝに、いとわか／＼しうそあるや、みやう
ふの君

王命婦

とし暮ていはゐの水もこほりとちみし人かけのあせも
行かな

大将もをかしうきゝ給物からなまわつらはし、こゝかしこ
とたつね（三〇オ）「ありきて、とらひとつと申也、女き
み

朧月夜

こゝろからかた／＼袖をぬらすかなあくをしふる声
につけても

とのたまふさま、はかなたちていとをかし

源

なけきつゝわか世はかくてすくせとやむねのあくへき
ときそともなく

なか／＼このよならぬつみとなりはへりぬへきを、なとき
こえたまふさまも、むくつけきまておほしいれたり

源

あふ事のかたきをけふにかきらすはいまいくよをかう
らみつゝへむ（三〇ウ）

御はたしにもこそときこえ給へは、たゝうちなけき給て

藤壺

なかきよのうらみを人にのこしてもかつはこゝろのあ
たとしらなん

みちのくにかみにうちとけかい給へるしもそみところある
あさちふのつゆのやとりに君ををきてよものあらしそ
しつこゝろなき

翻刻『源氏拔書』（上）

なとこまやかなるを、女君うちなき給て、御かへりもしろ
きしきしに

紫上

風ふけはまつそみたるゝ色かはるあさちかつゆにかゝ
るさゝかに

中将の君には、かくたひの空になむ物おもひにあくかれけ
るを（三一オ）「おもほししるかたもあらしかし、なとう
らみ給て、おまへには

源

かけまくはかしこけれともそのかみのあきおもほゆる
ゆふたすきかな

おもひやりきこえさする事おほく侍れとかひなくなん、心
とゝめてすこしこまやかにかきたり、御まへのはゆふのか
たはしに夢はかりに

権斎院

そのかみやいかゝはありし木綿たすき心にかけてしの
ふらむゆへ

むかしかやうなりしおりはかならず御あそひせさせ給しな
とおほしいつるに、おなしみかさの（ママ）うちなからへたゝる事
おほくかなし

源

こゝのへに霧やへたつる雲の上の（三一ウ）「月をは
るかにおもひやるかな

いとなつかしうきこゆるに、つらさもわすれてなみたそお
つる

藤壺

月かけはみしよの秋にかはらぬをへたつるきりのつら

くもあるかな

かむの君にも音つれ給はてひさしうなりにけり、はつしく
れいつしかとけしきたつに、いかゝおほされけんあやかれより

朧月夜

こからしのふくににつけつゝまちしまにおほつかなさの

ほともへにけり

御まへなる人ゝたれはかりならんなとつきしろふ、きこ
えさせてもかひなきことのはのけにこそかれ侍にけれ、身
のみ物うきに（三三才）

源

あひみすてしのふるころのなみたをはなへてのあきの
しくれとやみる

しも月のついたちころ、御こきなるに雪いたうふれり、大

将とのより宮にきこえたまふ

源

わかれにしけふはくれともみし人にゆきあふほとをい

つとたのまん

いつくもけふは物かなしうおほさるゝ程にて、御かへりみ

つからきこえ給へり

藤壺

なからふるほとはうけれと行かへるけふはそのよにあ

ふこゝちして

たれもゝあるかきりこゝろおさまらぬほとなれば、おほ
す事（三三才）ともえうちいて給はす

源

月のすむ雲井をかけてしたふともこのよのやみになを

やまとはむ

人ゝちかうさふらへは、さまゝみたるゝ心のうちをた
にえきこえあらはしたまはす、いふせし

藤壺

おほかたのうきにつけてはいとへともいつかこのよを

そむきはつへき

やなきのけしきはかりときをわすれぬなとさまゝなかめ
られて、むへも心ある、としのひやかにうちすむし給へる、
又なくめてたし

源

なかめかるあまのすみかとみるまゝに（三三才）ま

つしはたるゝ松かうらしま

ときこえ給へは、おくふかうしもあらず、みなほとけにゆ
つりきこえ給へる御ましところなれば、すこしけちかきこゝ

ちして

藤壺

ありし世の名こりたになきうら嶋にたちよるなみのめ

つらしきかな

あはましものをさゆりはの、とうたうとちめに、中将御か
はらけまいり給

三位中将

それもかとけさひらけたる初花にをとらぬ君かにほひ

とそみる

ほゝゑみてとり給て

源

ときならてけささく花は夏の雨に（三三才）しほれ
にけらしにほふほとなく

花ちる里

すきかてにやすらひたまふ、おりしもほとゝきすなきわた
るはもよほしきこえかはなるに、御くるまををさへさせ給
て、れいのこれみついいれ給ふ

源

をちかへりえそしのはれぬ郭公ほのかたらひしやとの
かきねを

御せうそこをいふ、わかやかなるけはひとあまたしてお
ほめくなるへし

ほとゝきすことゝふこゑはそれなれとあなおほつかな
さみたれのそら

ほとゝきすありつるかきねのにやおなしこゑにうちなく、
したひ（三四才）きにけるよとおほさるゝもえんなりか
し、いかにしりてかなと、しのひやかにくちすきひたまふ
たちはなのかをなつかしみほとゝきすはなちるさとを
たつねてそとふ

物をおほしつゝけたるけしきあさはかならぬも、ひとの御
もてなしからにやと、おほくのあはれそひける

麗景殿女御

ひとめなくあれゆくやとはたちはなの花こそそのきのつ
まとなりけれ

須磨

いと夜ふかくいてさせ給ふなるもさまかはりたる心ちもし

はへるかな（三四ウ）心くるしき人のいきたなきほとを
しはしもやすらはせ給はて、ときこえ給へは、うちなき給
て

源氏

とりへ山もえしけふりもまかふやとあまのしはやくう
らみにそゆく

ましていはけなくおはせしほとよりみたてまつりそめし人
ゝなれは、たとしへなき御さまをいみしとおもふ、まこと
や御かへりは

摂政北方

なき人のわかれやいとゝへたゝらんけふりとなりし雲
井ならては

御ひんかき給とてきやうたいにより給へるに、おもやせた
まへるかけのわれなからあてにきよらなれは、こよなうこ
そおとろへに（三五才）けれな、このかけのやうにやや
せて侍、あはれなるわさかな、などの給へは、女君なみた
をひとめにうけて見をこせたまへる、いとしのひかたし

源氏

身はかくてさすらへぬともきみかあたりさらぬかゝみ
のかけははなれし

ときこえ給へは

紫上

わかれてもかけたにとまるものならはかゝみをみても
なくさめてまし

れいの月のいりはつるほとよそへられてあはれ也、女君の
こき御そにうつりて、けにぬるゝかはなれは

花ちる里

月かけのやとれるそてはせはくとも（三五ウ）「とめ
ても見はやあかぬひかりを

いみしとおほいたるか心くるしければ、かつはなくさめき
こえたまふ

源氏

ゆきめぐりつゐにすむへき月かけのしはしくもらんそ
らななかめそ

いまはとよをおもはれ侍とは、うさもつらさもたくひな
き事にこそ侍けれ

源氏

あふせなきなみたのかはにしつみしやなかるゝみをの
はしめなりけん

と思給へいつるのみなんつみのかれかたく侍ける、みちの
ほともあやうければこまかにはえきこえ給はす、女いみし
うおほえ給て、しのひ給へと御そてよりあまるもところせ
くなん（三六オ）

朧月夜尚侍

なみたかはうかふみなはもきえぬへしなかれてのちの
せをもまたすて

御やまにまいり侍をおほんことつてや、ときこえ給に、と
みに物もえきこえ給はす、いみしうためらひ給御けしきな
り

薄雲

みしはなくあるははかなきよのはてをそむきしかひも
なくくそふる

いみしき御心まとひとに、おもほしあつむる事もえそつゝ

け給はぬ

源氏

わかれしにかなしき事はつきにしを又そのよのうさ
はまされる

かものしものみやしろをかれと見わたすほと、ふとも思
いてら（三六ウ）れて、おりて御むまのくちをとる

左近将監

ひきつれてあふひかさししそのかみをおもへはつらし
かものみつかき

ときこゆれば、けにいかにおもふらん、人よりけにはなや
かなりしものを、とおもほすも心くるし、君も御むまより
おり給てみやしろのかたおかみ給、かみにまかりまうしし
たまふ

源氏

うきよをはいまそわかるゝとゝまらん名をはたゝすの
神にまかせて

月もくもかくれてもりのこたちこふかく心すこし、かへり
いて給はんかたもしられぬ心ちしておかみ給に、ありし御
おもかけのけさや（三七オ）「かに見え給たるもそゝろさ
むきほとなり

源氏

なきかけやいかゝ見るらんよそへつゝなかむる月もく
もかくれぬる

けふなんみやこはなれ侍り いまひとたひまいらすなり侍
ぬるなん、あまたのうれへにまさりて思給へられ侍る、よ
ろつをしはかりてけいし給へ

源氏

いつかまたはるのみやこのはなをみんときうしなへる
山かつにして

心ほそけにおもほされたる御けしきもいみしうのみなん、
などそこはかとなくこゝろのみたれけるなるへし

王命婦

さきてとくちるはうけれとゆくはるは（三七ウ）は
なのみやこをたちかへりみよ

いかなるそらにかさそらへ給はんとうしろめたくかなしけ
れと、いみしうおほしたるかいとゝしかるへければ

源氏

いけるよのわかれをしらてちきりつゝいのちを人にか
きりけるかな

はかなし、などあさはかにきこえなしたまへは

紫上

おしからぬいのちにかへてめのまへのわかれをしはし
とゝめてしかな

またさるの時はかりにかのうらにつき給ぬ、かりそめのみ
ちにてもかゝるたひをならひ給はぬ御心に、こゝろほそさ
もおかしさもめ（三八オ）「つらかなり、大えとのといひ
けるところはいたうあれてまつはらはかりそしるしなりけ
る

源氏

からくにゝなをのこしける人よりもゆくゑしられぬい
へるをやせん

こしかたの山はかすみはるかにて、まことに三十里（ママ）のほか
のこゝちするにかいのしつたへかたし

同

ふるさとをみねのかすみはへたつれとなかむるそらは
おなし雲井か

こゝかしこおもひやりきこえ給て京へ人いたしたて給、二
条院にたてまつれたまふと入道の宮とにはかきもやり給は
すくら（三八ウ）「され給、みやには

源氏

まつしまのあまのとまやもいかならんすまのうら人し
ほたるゝころ

れいの中納言の君のもとにわたくしことのやうにて、なか
くにつれくゝとすきにしかたの思給へいてらるゝにつけ
て

源氏

こりすまのうらのみるめもゆかしきをしほやくあまの
いかゝおもはん

ありかたきさまなとをあはれに恋しくもいかゝはおほしい
てさらん、御かへりすこしこまやかにて、このころはいとゝ
しほたるゝことをやくにてまつしまに（三九オ）と
しふるあまもなけきをそつむ

薄雲

かんのきみの御返には

朧月夜尚侍

うらにたくあまたにつゝむこひなれはくゆるけふりよ
ゆくかたそなき

中納言のきみの御返のなかにあり、おもほしなげくさまな
といみしういひたるにも、あはれと思いてきこえ給ふ事も
あれはうちなかれぬ、ひめ君の御ふみは心ことにこまやか

なりける御返なれば、あはれなることおほくて

紫上

うら人のしほくむそてにくらへみよなみちへたつるよ
るのころもを（三九ウ）

さりともとし月はへ給はしと思やりきこえさするにも、つ
みふかきみのみこそきこえせんこともはるかなへけれ

御息所

うきめかるいせおのあまをおもひやれもしほたるてふ
すまのうらにて

よろつに思給へみたるゝよのありさまを、なをいかになり
はつへきにか、なとおほかり

同

いせしまやしほひのかたにあさりてもいふかひなきは
わか身なりけり

おなしくはしたひきこえてまし物をとなん、つれくのこゝ

ろほそきまゝに（四〇オ）

源氏

いせ人のなみのうへこくをふねにもうきめはからての
らましものを

同

あまかつむなけきのなかにしほたれていつまですまの
うらになかめん

御ふみともの心くをみ給に、おかしうもあはれにもめな
れぬこゝちして、いつれをもうちみ給つゝなくさめ、かつ
はものおもひのもよほし也

花散里

あれまさるのきのしのふをなかめつゝしけくもつゆの
かゝるそてかな

まくらうへはかりになりにつけり、きんをすこしかきならし

（ママ）

給へるにわれなからいとすこうきこゆれば、ひきさしたま
ふて（四〇ウ）

源氏

こひわひてなくねにまかふうらなみはおもふかたより
風やふくらん

御てつきのくろき御すゝにはえたるは、ふるさとのをんな
などのこひしきわか人との心ちみななくさみにけり

源氏

はつかりは恋しき人のつらなれやたひのそらとふこゑ
のかなしき

とのたまへは、よしきよ

かきつらねむかしのことそおもほゆるかりはそのよの
ともならねとも

みんなの大輔（四一オ）

こゝろからとこよをすてゝなくかりをくものよそとも
おもひけるかな

さきの左近のそう

とこよいてゝたひのそらなるかりなれとつらにをくれ
ぬほとそなくさむ

おりくの事とも思いて給によゝとなかれて、よふけ侍ぬ
ときこゆれと、なをいりたまはす

源氏

みるほとそしはしなくさむめぐりあはんつきのみやこ
ははるかなれとも

いまこゝにありとすしつゝいり給ぬ、まことに御そは御み
はなたすをい給へり（四一ウ）

^同 うしとのみひとへに物はおもほえてひたりみきにもぬ
るゝそてかな

むかへの人ゝもまかゝしきまてなきみちたり、五節は
とかくしてきこえたり

^{五節} ことのねにひきとめらるゝつなてなはたゆたふ心きみ
しるらめや

すきゝしきも人なとかめそ、ときこえたり、ほをゑみて
見給もいとつかしけなり

^{源氏} こゝろありて引てのつなのたゆたはゝうちすきましや
すまのうらなみ

いりかたの月かけすこくみゆるに、たゝこれにしにゆくな
りとひとり（四二オ）こちたまふて

いつかたのくもちにわれもまとひなん月のみるらんこ
ともはつかし

れいのまとろまれぬあかつきのそらに、うらちとりあはれ
になく

ともちとりもろこゑになくあかつきはひとりねさめの
とこもたのもし

院の御けしき、内のうへのいときよらになまめきてわかっ
くれるくをすしなとし給し御ありさまなど、おもひいてき

こえたまふ

^{源氏} いつとなくおほみや人のこひしきにさくらかさししけ
ふもきにけり（四二ウ）

御ともの人みななみたをなかつ、をのかしゝもはるかなる
わかれおしむへかめり、あさはらけの空にかりつれてわた
る、あるしの君

^{源氏} ふるさとをいつれのはるかゆきてみんうらやましきは
かへるかりかね

宰相さらにたちいてんこゝちせて

^{致仕} あかなくにかりのとこよをたちわかれはなのみやこに
みちやまとはん

みをくり給けしきいとなかゝなり、いつまたたいめ給は
らんとすらん、さりともかくてやは、と申たまふに、ある
しの殿

^{源氏} 雲ちかくとひかふたつもそらにみよ（四三オ）われ
ははるひのくもりなき身そ

はかゝしくよにましらふ事かたく侍りければなにか、み
やこのさかひをも又みんとなんおもほえはへらん、とのた
まふに、宰相

^{致仕} たつかなきくも井にひとりねをそなくつはさならへし
ともをこひつゝ

ことゝしき人かたなとつくりてふねにのせてなかつを見

給も、みによそへられて

源氏

しらすりしおほうみのはらへなかれきてひとかたにやはものはかなしき

うみのおもてうらくとなきわたりてゆくゑもしらぬに、
きし（四三ウ）かたゆくさきおもほしつゝけられて

同

やをよろつかみもあはれとおもふらんをかせるつみの
それとなければ

あかし

御文には、あさましくをやみなきころのけしきに、いとゝ
そらさへとつる心ちして、なかめやるかたなくなん

紫

浦風やいかにふくらんおもひやるそてうちぬらしなみ

まなきころ

かみのたすけおろかならさりけり、といふをきゝたまふも、
いとこゝろほそしといへはおろかなり（四四オ）

源

うみにますかみのたすけにかゝらすはしほのやをあひ
にさすらへなまし

おもかけのまきるゝおりなきを、かくおほつかなゝからや
と、こゝろかなしきさまゝのうれはしさはさしをきて

源

はるかにもおもひやるかなしらすりしうらよりをちに
うらつたひして

いつかたとなくゆくゑなき心ちし給ふに、たゝめのまへに

見やらるゝはあはちしまなりけり、あはとはるかに、
のたまへは（ママ）

源

あはとみるあはちのしまのあはれさへのこるくまなく

すめる夜の月（四四ウ）

心ほそきひとりすみのなくさめにも、などの給ふを、かき
りなくうれしとおもへり

ひとりねは君もしりぬやつれゝとおもひあかしのう
らさひしさを

ましてとし月を思ふ給へわたるいふせさをしはからせた
まへ、ときこゆるけはひなど、わなゝきたれとさすかにゆ
へなからす、されとうらなれ給へる人は、とて

源

たひころもうらかなしさにあかしかねくさのまくらは
ゆめもむすはす

おもひのほかなることもこもるへかめると心つかひしたま
ひて、こまのくるみ色のかみのえならぬにひきつくろひ給
ひて（四五オ）

源

をちこちもしらぬくも井をなかめわひかすめしやとの
木すゑをそとふ

入道そかく、かしこきはゐなかひてはへる、たもとにあま
りはへるにや、さらにみたまへもをよひはへらぬかしこさ
になん、さるは

入

なかむらんおなしくもゐをなかむれはおもひもおなし

おもひなるへし

めさましく見給、御つかひなへてならぬたまもかつたり、
又の日、せんしかきはみしらぬ心ちしてなん

源氏

いふせくもころに物をなやむかなやよいかにと
ふ人もなみ（四五ウ）

いみしうかひなければ、なか／＼世にある物とたつねしり
たまふにつけて涙くまれて、れいのとうなきをせめていは
れて、あさからすしめるむらさきのかみにすみつきこくう
すくまきはして

明石上

おもふらんころのほとや／＼よいかにまたみぬ人のき／＼
かなやまむ

みまほしき入江の月かけにまつこひしき人の御ことをおも
ひいてきこえ給、やかてむまひきすきておもひきぬへくお
ほさる

源氏

秋の夜のつきけのこまよわかこふるくも井をかけれと
きのまも見ん

さうのことのひきならされたるも、けはいしとけなくうち
とけ（四六オ）」なからかきまさくりけるほと／＼みえてお
かしければ、き／＼ならしたることをさへよろつにの給ふ

源氏

むつことをかたりあはせん人もかなうき世のゆめもな
かはさむやと

明石上

あけぬよにやかてまとへるころにはいつれをゆめと

翻刻『源氏拔書』（上）

わきてかたらん

へたてなき心のほとはおほしあはせよ、ちかひしことも、
なとかきかきて、なに事につけても

源氏

しほ／＼とまつそなかる／＼かりそめのみるめはあまの
すさひなれとも（四六ウ）

とある御返をいとなに心もなくらうたけにかき給てはてに、
しのひかねたる御ゆめかたりにつけても、おもひあはせら
るゝ事おほかるを

紫上

うらなくもおもひけるかなちきりしを松よりなみはこ
えしものそと

浪のこゑ秋の風にはなをひ／＼きことなり、しほやくけふり
かすかにたなひきて、とりあつめたるところのさまなり

源氏

このたひはたちわかつとももしほやくけふりはおなし
かたになひかん

とのたまへは、をんな

明石上

かきつめてあまのたくものけふりにもいまはかひなき
うらみたにせし（四七オ）

心のかきりゆくさきのちきりをのみしたまふ、きんはまた
かきあはするまでのかたみにとのたまふ、をんな

明石上

なをさりにたのみをくめるひとことをつきせぬねにや
かけてしのはむ

といふともなきくちすさみをうらみたまひて

源氏

あふまてのかたみにちきる中のをのしらへはことにか
はらさらなむ

たち給あか月には夜ふかくいてたまひて、御むかへの人
くもさはかしければこゝろもそらなれと、人めをはから
ひて

同

うちすてゝたつもかなしきうらなみの（四七ウ）な
こりいかにとおもひやるかな

御かへり

明石上

としへつるとまやもあれてうき波のかへるかたにや身
をたくへまし

まことに宮このつとにもしつへき御をくり物なとゆへつき
て思ひよらぬくまなし、けふたてまつるへきかりの御さう
そくに

入

よるなみのたちかさねたるたひころもしほとけしとや
人のいとはん

とあるを御らんしつけて、さはかしけれは

源氏

かたみにそかふへかりけるあふことのひかすへたてぬ
中のころもを（四八オ）

けふの御をくりにつかうまつらん事なと申て、ひまもなく
かいをつくるもいとおしなから、わかき人みはわらひぬへ
し

入

世をうみにこゝらしほしむ身となりてなをこのきしを

えこそはなれね

おもひすてかたきすちもあめれは、いまいとくみなほし
給てむ、たゝこのすみかこそみすてかたけれ、いかゝすへ
き、とて

源

みやこいてし春のなけきにをとらめやとしふるうらを
わかれぬる秋

あそひなともせず、むかしきゝしものゝねともきかてひさ
しうなりにけるかな、とのたまはするに（四八ウ）

源

わたつみにしつみうらひれひるの子かあしたゝさりし
としはへにけり

ときこえ給へは、いとあはれにこゝろはつかしくおほしめ
されて

朱雀院

みやはしらめくりあひけるとときしあれはわかれしはる
のうらみのこすな

御ふみつかはす、ひきかくしていとこまやかにかき給へり、
なみのよるくゝいかに

源氏

なけきつゝあかしのうらにあさきりのたつやと人をお
もひやるかな

かのそちのむすめの五節、あいなく人しれぬものおもひさ
めぬ（四九オ）るこゝちして、まくなきつくりてさしを
かせたり

五節君

すまのうらにこゝろをよせしふな人のやかてくたせる

袖をみせはや

てなとこよなくまさりにけりと見おほせてつかはす

源氏

かへりてはかことやせましよせたりしなこりにそての
ひかたかりしを

(以下続稿)